

## 〔特別講義〕

### 千の風と魂の行方——万葉挽歌をたどって

犬 飼 公 之

1

ええ、犬飼です。

実はこの講義はね、最初学生向きの授業をして欲しいというので受けたんです。ところが、だんだん話が大きくなつて。しかも、途中から、私の写真入りのポスターができて。最初はこんなに小さかったんですよ。だから無視していたら、しばらくたつたら藁半紙くらいの大きさになって、今日学校にきたら模造紙くらいにでかい。これはかなり恥ずかしいです。

今日はそこに書いておきましたけれど、『千の風と魂の行方』というお話をしようと思っています。特に、万葉挽歌をたどってお話をしたいと。

プリントをご覧いただきました。

つい、数年前に、「千の風になつて」という歌が話題になりました。新井満さんが作った歌でした。で、紅白歌合戦かなんかでも、何ていいました、秋葉……？誰だっけ。こういう時ね、普通ぱつと声が返ってこない。あきがわさんでいいんだよね？違う？あきかわさん（会場より）あきかわ、失礼しました。あきかわ何某……雅史さん（会場より）ああ、そう。秋川雅史さんが朗々と紅白歌合戦で歌っておったので皆さんも記憶にあるだろうと思ひ

ます。

今日のこのお話は、まず皆さんが「千の風になつて」を歌うところから始まります。といつてもおそらく歌わないか。あ、君だつたら歌いそうだ。出だしのとこだけやってみて。ちよつとこっちにおいで。四十年前に教えた子がみえてるんで。ちよつと出だしだけうたつてみて。

（会場より宮城学院の卒業生一人登場。「千の風になつて」の出だしをうたう）

宮城学院の卒業生つてすごいでしょ。おまえやつてくれない？と目を向けると、即座にやつてくれるの。

皆さんこの歌は聞いたことがありだと思ふけれども、実は悲しい歌でしょ。私のお墓の前で泣かないでくださいと。新井さんは新潟の出身なんです、幼友達のおさんがお亡くなりになつて、その追悼文集にあつた作者不詳の英語詩をもとに、とはいえ、むしろ新井さんの自由訳だそうです。追悼の曲としたものだといひます。

彼女の魂は、簡単に言つてしまえば、お墓に眠っているんじゃない。今この空間の中にずっと千の風になつて生きつづけているんだと。

これが日本中の人々にうけとめられ、紅白歌合戦でも歌われることになつた。このイメージに注目したいと思ひます。

死んだあとわれわれは存在し続けている。空気の粒子のようになつてこの宇宙を吹き渡っていると。われわれはそういう認識やイメージをうけとめているといへましよう。

ところがこれが話題になつてから、吉竹純さんという方が、『過去未来』という歌集を出しました。その歌集の中に、されどゆつくりと墓の中に眠りたし千の風へと千切れるよりも

という歌があるんです。千の風に千切れてしまふというけれど、だけどやはり自分はもつとゆつくりと、そのままお墓の中で眠つていたいんだと。

同じことは、小沢昭一さんも言っています。数年前に亡くなりましたが、コラムの中で、俺も大きな空を渡る風になんかなりたくない。お墓でゆつくりしたいと書いてますね。

何を言いたいかもうわかったでしょう。要するに現代日本人は死後に対して二つのイメージを持ちあわせていること。われわれは、妙な言い方ですが、死後もありつけ、生きつけ、この大きな空を、粒子のように吹き渡っているというイメージを持っている。もう一方で、お墓の中でゆっくりとそのままの存在としてあり続けたいという思いをもっているらしい。

ちよつとだけ難しい話になりますが、この半世紀くらいを見ても、いわゆる葬送事情といいますが、死にかかわる問題がクローズアップされています。特に私は一九九〇年代あたりから、いろいろ問題がこの東アジア圏で発生しているという風に考えています。

ひとつは中国。中華人民共和国は早くから火葬から火葬への転換をはかろうとし、国家の指導的立場にある人々は率先して火葬を行い範を垂れようとなりました。一九五〇年代半ばのことです。しかし、火葬への転換は人々になかなか浸透してはいかなかった。そして一九九〇年に「土地を濫りに占有して喪葬および墳墓を建てることを制止することに關する通知」が民政部から出されます。

これは大変面白い問題で、それだけ喋つても一時間半過ぎちゃうでしょう。だから一番特徴的なことを言うと、毛沢東の遺体は天安門広場の記念堂で保存されています。ところが対して周恩来は散骨されました。周恩来自身これが人間の心の解放であり、革命なんだと考えたようです。一九九二年にちょうど私は中国にいておりましたが、その時に周恩來の奥さん、鄧穎超さんが亡くなりましたが、その骨も海に撒かれました。

中国大陸は十三億何千万の人間、へたすると十四億じゃないかともいわれますが、人口が多い。土地も広いんだけど、決して耕作地は豊富なわけではありませんね。その状況の中で、人間が生きていく上で葬制の改革は重要だったのだでしょう。

葬送を豪華にやつたり墳墓を大きく建てること、しかも中国は基本的に個人墓ですから、それがどんどん増えていってしまうというのは、許されないことだったのでしょう。そういう状況や経緯を負って一九九〇年にさきの通知が出されて、それが地方に広がっていくんですが、その時に各地方で「殯葬管理方式及びその実施細則」というものが出

されます。これが出された時に、記憶にある方もいるかもしれませんが、一九九二年の四月か五月だったと思います。あの村では四十人あるいは六十人に及ぶともいわれましたが、老人たちが自殺をしてしまったのです。火葬を導入されるというのでは自分たちの死後の世界がない。今まで通りに自分たちはあの墳墓の中に眠りたいんだと。

ここに土葬と火葬をめぐる二つの死生観、死後のイメージの違いを読みとっておきたいと思います。

次に韓国をみると、これはもうちよつと後ですが、二〇〇五年に政府は「火葬中心の葬墓文化時代の元年」という宣言をいたしました。韓国の歴史をみると、高麗の時代に非常に仏教が盛んでありましたが、李氏朝鮮が成立いたしました以降、きわめて強い儒教教理の国家が出来上がり、かつ個人墓を中心にした墳墓が次々と作られてまいりました。

今でもそうじゃないでしょうか、仁川空港に着いて、ソウル市内まで行きますと、いちじるしい数の墳墓が並んでいます。しかしここでも、もう限界なのでしょう。火葬中心の葬墓文化に変わろうとしているのです。

これは後で触れる時間があるかどうかわかりませんが、日本で現在、自然葬と言いますが、あの散骨という葬法も、私の知るかぎり近現代では韓国のほうが早いですね。だから一部ではそういう動きはあった。しかし、全体は土葬が中心であったということでしょう。

一方日本ではどうかというと、一九九一年に葬送の自由をすすめる会が発足いたしました。遺灰を海や山に還す自然葬、古代的なタームでいうと散骨、ですね。骨を撒いてしまふ。散らす骨と書いているけれど、ここに手へんをつけてみるともつとよくわかる。撒くという字ですね。骨を撒く。そしてその秋に第一回の自然葬が相模灘で実施されました。仙台にもこのすすめる会があるそうですね。

そのような東アジア圏の全体を考えた上で、現代日本人は一方で死後、中空に粒子のようになって、風のように吹きわたっているという認識と、もう一方に、お墓の中でゆつくりとあり続けたい、という思いの二つのイメージをもっていることを抑えておきたいと思います。

2

これ二時までだったね。それで、突然ですが、万葉に話を進めます。私は『万葉集』をずっと読んできて、生と死に



かわつて、これは至言だなあとと思った表現がありました。それは柿本人麻呂がいう「目言も絶えぬ」という表現です。人麻呂は、人と人をつなぐ基本を「目」と「言」（ことば）によってとらえていたとみられます。ところが相手に死なれたその瞬間に、目によって繋がっていた絆、言葉によって繋がっていた絆が切れてしまふ。「絶えぬ」というのは「切れた」という意味ですからね。

これは見事な表現ではありませんか。理屈をこねまわして死の悲しみがあだこうだというよりは、はるかに実感を踏まえた、生のありようを見事に表現していると思います。「目」と「言」の絆を絶たれることの悲しみこそ、死別の悲しみであるという風に人麻呂はうけとめているわけです。

ところでその「目」の絆とは生身の姿・形をいうのでしょうか。せんじつめると肉体をいうのでしょうか。そして死別の悲しみのなかで人々は亡骸に執着するようになる。日本文学はずっと、その亡骸に執着し続けてきたように思われます。『源氏物語』の、物の怪に取り殺された夕顔についても、源氏は、「便なしと思ふべけれど、いま一度かの亡骸を見ざらむがいといふせかるべきを、馬にてもものせむ」と語ります。不都合だと思ふだろうが、もう一度だけ、あの人の亡骸を見ありますから、死者に直接接する事は許されません。不都合だと思ふだろうが、もう一度だけ、あの人の亡骸を見ないではなんとも気持がおさまらない。馬で行こう。という風に言います。また「なほ、悲しさのやる方なく、ただ今の亡骸で見では、またいつの世にかありし容貌（かたち）をも見む」と語ります。どうしても悲しみをはらすすべもなく、せめて今ある亡骸を見ないでは、ふたたびいつの世に、ありしならの姿に会うことができようかこう語っています。

こうした亡骸への執着は日本文学においてキリがないほどに語られてまいりました。私はその遡った先にある事例が『日本書紀』に語られている影媛物語だと思う。

これも細かくお話している暇はないけれど、影媛は殺された夫を埋葬して、いよいよ家に戻ろうとするときに、悲しんで次のように言ったというんです。「苦しきかな。今日、我が愛しき夫を失ひつること」と。

よく考えてみてください。凄いことを言ってるんです。夫が殺されるのを目の当たりにしながら、そこで悲しみが湧

き上がったと言ってるんじゃない。その夫の亡骸を土に葬った。その瞬間に、私の愛おしい夫を失ったと表現しているんです。亡骸を葬ることは、それまで二人をつないできた「目」の絆が絶ち切られることであり、そこにわれわれは死の悲しみをうけとめてきたといえましょう。

3

日本文学は亡骸への執着をずっと語り続けてきた、あるいは歌い続けてきた。ところがもう一方に、魂への執着を歌います。たとえば『万葉集』に次のような歌があります。

青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬかも

青々と樹木が茂り、旗が林立しているように見える木幡山のあたりを、魂が行き通うさまが目には見える。しかし、直にお逢いできないことだと。つまり、魂がそこを通っているのを人々は目にうけとめているのです。

本来、魂というのは目に見えません。見えないはずのものが、姿を現すと古代日本人は考えてもいたのです。そのことは同じ『万葉集』の中に出てまいります。

人はよし思ひやむとも玉かづら影に見えつつ忘らえぬかも

これいい歌じゃないですか。皆さんどうぞ一度声に出して読んでください。

他人はよしや思い慕うことをやめようとも、私にはあの方（あの方というのは天智天皇のことです）が、影となって見えて見えて忘れられないことだ、というんです。

これは倭太后という女性がうたった歌なんですが、夫である天智天皇は、ほかの人はともかく、自分には影となって見え続けているというのです。「影」とは一言でいうと魂の姿のことです。

影として死者の姿を見たという話なら現代にもあります。私は何度も聞きました。たとえば東京から仙台にきて、もう十年も経っちゃったね。宮城沖地震の前だから。その地域の文学を愛好する人たちが『万葉集』の話をしてくださいというので会を作り、あるお宅で講義をしておりましたが、その方がだんなさんを亡くした後、しばしば影を見たというのです。そのお宅の窓を開けて外をみると、庭石のところに向こう向きに座っているんですって。

倭太后は亡くなった天智天皇の姿が影として見えて忘れがたいというのですから、「目」の絆は切れていないのですね。

さらに資料の②のところ。これも『万葉集』の歌ですが、亡くなった天武天皇が夕方になればあの雷山いなづまという神の山をずっとご覧になっているだろう。また、紅葉はどうなったかななんてきつと問うているだろうというのです。つまり死後の魂を思い、生前のように山を見たり、われわれの耳には聞きがたい言葉であるけれども、問いかけてるだろうなというのです。

その③に挙げた歌はもうみなさん知っている柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」。妻に死なれて、血の涙を流し悼み悲しんだという歌です。

人麻呂は自分の悲しみを慰めようと、手を尽くす。しかし、もはやいかなる手だてもかないがたいことを知ったあとで「わが恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありや」とうたう。千枚重ねの布のその一重ほどでも慰めることはできないだろうかというのです。そして自分の妻がいつも出掛けていた「軽の市」に立って耳を澄ましたと。何をさがし求めていたかという、妻の声だよね。ところがそれは遠い畝傍の山で鳴いている鳥の声ほどにも聞こえなかったと。それからその市場を通る人々を眺め、妻の姿を探してみた。しかし、妻に似た人はひとりもいなかったというのです。「玉ほこの 道行き人も 一人だに 似てし行かねば」と。もはや、すべての慰めるすべを失った時に人麻呂が何をしたのかというと、妻の名前を呼び、袖を振った、というんです。妻の魂に呼びかけ、袖を振って魂をよびもどそうとしているのです。古代中国にも同じ技法があり、それを招魂と表現します。魂を招くのです。つまり人麻呂がしえたことは、死んだ妻の魂をなんとか呼び求めたいという祈りだったのです。

次の歌で人麻呂は魂を求めて山に行ったといいます。妻に死なれたあと、大鳥の羽易の山に、あなたの奥さんはいらっしゃるよと、人にいわれて人麻呂は難渋しながらその山を訪ねたと。しかし、訪ねてみたけれども「うつせみと思ひし妹」つまり現実の姿をもってあるだろうと思ったその妻は、玉がキラキラするほどにもほのかにも見えない。

「良けくもそなき」とうたっています。つまりここでも、人麻呂は肉体そのものに執着し、もう一方で魂の存在に執着している。

そのありようが実に奈良時代以降日本文学に続いているのです。その重みを私はうけとめたいと考えています。

4

時間がおしてきました。資料四はあとで時間があればやることにして、五にいけますが、そのように日本人がというか、日本文学が持ちつづける死の意識やイメージの背景に、儒教と仏教の違いがかかわっていることをとらえたいと思います。

最初に言っちゃうとこうなんです。儒教は、一言でいうと人間の身体をいっさい傷つけてはならないという考えです。お父さんとお母さんから授かったこの身を傷つけてはならないと。

中国漢（の時）代、仏教がインドから中国に入ってまいります。その時にね、道教と儒教と仏教の三教が争う時代があるんです。その時に、儒教が仏教を何て批判したかというところ、仏教は髪の毛剃るでしょ、肉体を傷めてるって批判している。そのように儒教は徹底的に肉体を重視するのです。だから死者の遺体もそのまま保存しなければならない。火葬してしまうなんてとんでもない話。まずその違いを頭に置いておいてください。

加地伸行さんという方が『儒教とは何か』っていう本で言っています。儒教こそ実は死と深く結びついた宗教なのだ。人間を精神と肉体とに分け、精神の主宰者（これを魂と言う）と、肉体の主宰者（これを魄と言う）と。

皆さん知っていますね。魂魄（コンバク）という言い方をするでしょ。あれは内容的に違うのです。「魂」のほうは精神の主宰者、『礼記』によると「氣」につく靈魂をいうのです。それに対して肉体につく靈魂のほうを「魄」という。中国では魂・魄という二重性において靈魂を捉えておりました。

そしてこの魂・魄が一致している時を生きている状態、逆に、魂と魄が分離している時が死の状態であるということになるのです。すなわち、肉体の呼吸停止が始まると死が始まる。それは脳死ではなく心臓死を意味する。みなさん経験した事あると思うんですが、私の場合、お婆さんが小学校一年生の時に亡くなった。冬だったですね。火葬場が開い

ていなかったので一週間くらいお通夜がつづいて、ずっと寝かしておりますと、爪は伸びるし、髯は伸びる。つまり人間は死んでいない。細胞は死んでいないのです。脳死はきわめて一方的な判断ではない。

古代において死は脳死ではなく心臓死を意味する。その時に「魂」と「魄」とが分離し、「魂」の方は天上に昇っていく。「魄」は地下へと移動していつちやう。儒教はこれを死ととらえた。

だから逆に、分離していた「魂」と「魄」を呼び戻して、一致させると生の状態に戻る。もう一度人間は復活しうるということになる。それは資料にあげておいたけれども、中国の文学にいっぱい出てくる。いわゆる招魂の文学です。「魂よ。帰り来たれ」と。

つまり儒教論理では死とともに脱けてた靈魂は再びもどってくる可能性を持つ。だから、死後、遺体をそのまま地中に葬り、墓を作る。それが遺骨を重視する根本感覚となっている。

一方、仏教では、死者の肉体はもはや単なる物体に過ぎない。だから結果的に、仏教は火葬を選択した。死者の肉体には仏教の意味が認められない。したがって加地さんは焼いたあとの骨を拝むなどということは、仏教的にはおかしいという。これは面白いですね。

ところで仏教は「地」「水」「火」「風」という四つの要素から存在は成り立つという。「地」「水」「火」「風」がたまに合することにおいて、あるいは万葉の表現でいうと仮合<sup>けごう</sup>することにおいて人間は存在すると。だから生身の人間存在は虚仮<sup>こけ</sup>にすぎないというのです。

くり返していうと、その論理にもとづいて仏教は火葬を選び取った。そして肉体を焚焼することで、人間は虚仮なる身から解放される。本質は「地」「水」「火」「風」にあるわけですから。

さらに言うると虚仮の状態にある人間をいちはやく、かつ、徹底して解放する葬法。それが散骨でありましょう。火葬骨は粉碎され撒き散らされ、虚仮の身の痕跡をとどめない。仏教的には一番かなっているということになりましょう。

そういう散骨を日本でいつ頃からやっているかというところ、万葉の歌の中には散骨の歌がすでにある。また、天皇家の歴史で言うと、持統天皇が最初の火葬。それから数代火葬されているし、淳和天皇が散骨されたという記録もあるん

じゃないかな。

ただし、文献的には火葬も散骨も日本よりも朝鮮のほうが早い。万葉歌をみると、資料の②のところ。

玉梓の妹は玉かもあしひきの清き山辺に撒けば散りぬる

おそらく夜つびて火葬を行います。そして朝になって山辺に妻（妹）の骨を撒いた。撒いたら散っていったということです。

しかし、物体として散っていったとは言っていない。「玉梓の」は「妹」にかかる枕詞でありましょう。「妹」は「玉」であるのかと。「妹（妻）」を撒いているという認識なんですね。次の歌では、「妹」は「花」なのかといっている。「花」として「妹」を撒いているといえましょう。

さて、図式的にいうと火葬、散骨（あるいは自然葬）は仏教的、土葬は儒教的だといえましょうし、われわれが死後、風となつて空中を浮遊するというようなイメージは仏教論理に近いといえましょう。一方、肉体や遺骸に対し執着するのは儒教教理になつているといえましょう。

ところが、そういう原理的な話をしているだけではダメなんで、奈良朝ですらすでに儒教と仏教が習合し、輻輳して理解されていたということがわかつております。

資料の四に、魂の遊離と借屍還魂という部分があります。借屍還魂というのは何かというと、屍を借りて、もう一度魂が戻つてきて復活するという説話のことです。その説話は②の『日本霊異記』という日本最古の仏教説話集と呼ばれるものの中にみえています。衣女の話です。

衣女という女の子が死ぬことになったのよ。そしたら皆さんが知っている表現でいえば、閻魔さんのところから、奈良時代は閻魔つていわないで閻羅つていうの。その閻羅王宮から鬼が衣女を連れにくるの。ところが一生懸命衣女を探しているうちに疲れちゃった。

衣女さんの家では、疫病神が取っ付いて病気になつているだろうから、疫病神にご馳走を与えたら助かるかもしれないと、家の前にご馳走を並べていたんだと。

衣女を探していた鬼は疲れきってついついそのご馳走を食べちゃった。それでなんとかご恩返しをしないといけないと思って、衣女を助けることにする。そして別の村に同じ名前の女がいるからそれを連れて行くことにして、閻羅王宮に連れて行っちゃったの。閻羅王の前に引き出してはみたもののすぐ違うじゃないか。別な女を連れてきてどうするかということになる。閻羅王は連れて来られた衣女さんを地上に戻したのだけど、戻ってみたら、その家ですでにその子の肉体を火葬しちゃってたの。これは困った。だけでもう一人の衣女の肉体はまだ残っている。そこでその屍に入って衣女は蘇ったという話。だから、この衣女は新たに二人のお父さんとお母さんができ、財産も二つの家のもの全部もらった。借屍還魂は日本固有の説話というのではありませんが、これが奈良時代の仏教説話であることが重要で、奈良時代において仏教と儒教の論理が習合しながらうけとめられているんですね。

われわれは火葬文化のなかにありますが、ついこの間、何年経った？四年？あの東日本大震災のときに、私はつくづく、われわれが肉体や遺体に執着していることを知りました。皆さん大変な思いをされたわけですが、たとえば佐藤通雅さんの歌集に『昔話（むがすこ）』というのがあるよね。なんとかこの状況がむがすこととなる時が早くこいと。そのとおりですね。

宮城学院で教えておられた佐藤成晃さんの歌集『地津震波』にも遺体を探す人々の姿、特に自分の妻が探し続けている姿がうたわれています。そして、

「遺体などもう探すな」といふやうな夢を見せてよせめて妻には

もう遺体なんて探すのやめよと。そんな夢をみせたいと。毎日遺体探しに出歩いているというわけでしょ。そのように震災をとおして遺体への執着を私はまざまざと見せられた思いがしました。

合同歌集『東日本大震災の歌』。これも宮城学院の生涯学習をお持ちの徳山高明さんが中心にまとめたものですが、その中の、さまざまな歌がそうですね。特に多いのが安置所を探して肉体を求める人々の姿です。私は日本人の中に千数百年に及んで変らない肉体への執着というものを見た思いがいたします。

しかしもう一方で、遺体を火葬できないまま仮に埋葬していただき、そんなときテレビで観ておいたら、ああかわいそうに、あの遺体は火葬されることもないままこんなところに晒されている、とコメントした人もおりました。日本人は一方では火葬によってその人は救われるという思いをもっているのでしょうか。だけど、だけど人々は肉体を探そうと。あの震災の時に、私の家に五人くらい学生が避難しておりました。私の家もめっちゃくちゃでしたが。来ていた中のひとりはお母さんが亡くなられた。それから二・三週間経って、母の遺体が見つかりました。よかったですと報告にきました。遺体が見つかったとは何だろうと思ひながら、一方で納得するものが私の中にもあった。

あの頃、そういう話が飛び交っていたじゃないですか。大川小学校の例を見てください。たとえば「毎日新聞」が二〇一一年九月二三日「おかえり、小春、重機に乗り長女を捜し続けた母」という記事を載せています。肉体の一部が見つかったんですね。ところが肉体の一部であっても人々は、ある種の安堵を覚え、その子が戻ってきてくれたと思っている。

5

そういう現在のわれわれの中にある、あるいはわれわれのなかにありつづける死後の思いやイメージを踏まえながら、最後に、万葉歌をとりあげたいと思います。父親が自分の子の死を嘆く歌として私は和歌史のなかで絶唱に数えてもいいかと思う歌です。「男子の名を古日といふに恋ふる歌」。作者はわかっておりません。山上憶良の歌ではないかともいわれています。

世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我が中の 生まれ出でたる 白玉の 我が子古日は  
古日というのは幼くして死んでしまった子供の名です。自分にとっては世の人間たちが最も尊く願っているような七宝も、一体何だというのか。何にも増して、われわれ夫婦の中に生れ出てきた白い玉のような我が子古日よとうたい、次いで古日のいけなく可愛い姿が詠まれていきます。

明星の 明くる朝は しきたへの 床の辺去らず 立てれども 居れども ともに戯れ 夕星の 夕になれば  
いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさかり さきくさの 中にを寝むと うつくしく しが語らへば



朝の明星が輝くような朝になると、「床の辺去らず」というから柔らかな蒲団のあたりを離れない。そして立つても座つてもお父さんやお母さんと一緒に戯れて一日を過ごし、夕方の星が輝く夕べになると、今度はお父さんとお母さんに「さあ寝よう」と言つて手を繋いで、こう言う。

「父母も うへはなさかり さきくさの 中にを寝む」と。お父さんもお母さんも僕のところ離れちゃやだよ。僕はそのふたりの真ん中に寝るんだと、可愛らしげに語らう。

父親はこう思つた。いつかお前がちゃんと大人になつて、悪かろうと良かろうとその姿を見たいと。それを心頼みにしてきたのに思いがけずに邪悪な風が古日に覆いかぶさつてきた。古代人にとっては、人間が病になるというのは、横しまな風が覆つてくることによると理解する。それで親たちは手を尽くした。だけど治す方法もわからない。結局神に祈るほかない。「白たへの たすきを掛け」「まそ鏡 手に取り持ちて」天上の神を仰ぎながらひたすらお願いする。それから大地の神に額を土にすりつけるようにして祈る。

ところが古日は、ほんのしばらくも良くなる状況がないままに、だんだん肉体が衰え、朝ごとに掛けてくれたことばも発しなくなつてしまつた。そしてとうとう、命が絶えてしまつたと。

それで父親はやるすべなく足をすりながら叫ぶ。それから大地にうつぶし、天上世界を仰ぎ、さらには胸を打ちながら言う。私たちの手の中に支え続けてきた私の子供を天上世界に手放してしまつた。そしてこれが世の中の道理というものかと。これがこの世の宿命なのかとうたつてゐるのです。反歌二首、

稚ければ道行き知らじ 賂はせむしたへの使ひ負ひて通らせ

「稚ければ道行き知らじ」で一つ、それから「賂はせむ」でまた一つ。プツプツと切れていくような、悲しみをしばらく出すような調べになつていますね。

幼いので死出の道筋すら知るまい。賄賂をあげようと。誰に對してかつていうと、黄泉よみじの使いにです。賂を与えるからどうかこの幼い子を背負つて死の世界に連れて行つてくれと祈つてゐるのです。また、

布施置きて我は乞ひ禱いのちむあざむかず直に率行きて天路知らしめ

布施という言葉は仏教語ですね。お布施を置いて、私はお願いする。だからあざむくことなく私の古日を真つ直ぐに天路に連れて行ってくれ。こういう歌なんです。

長歌はかえがたい宝物として授かったわが子をうたい、いとけない姿をうたい、その成長を頼みながら果し得なかった悲しみを、この世の宿命としてうけ入れざるを得ない激越な嘆きとともにうたう。そこにさきに言った「目」と「言」（ことば）の絆を絶たれる悲しみがうたわれていることも疑いない。

また、反歌は「賂はせむ」――布施も置こう。なんとか天逝したわが子を天路に連れていつてやってくれと祈るほかない。愚かしいほどに一途な思いがうたわれている。

もう時間が来てしまいました。ここには仏教的な要素と儒教的要素を輻輳して持ちあわせる古代日本人の死生観が認められます。そして今日の私たちの死後のイメージや思いに通じる悲しみがうたわれていると思います。それをいわば結論のかわりとして今日の講義を終えたいと思います。

\* 本稿は、二〇一五年一月一二日に行われた日本文学科主催特別講義の録音データを、書き起こしたものである。

# 千の風と魂の行方——万葉挽歌をたどって（資料）

犬 飼 公 之

一 はじめに（死後のイメージ）

## ① 千の風になって 新井満

私のお墓の前で／泣かないでください／そこに私はいません／眠ってなんかいません／千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています／  
秋には光になって／畑にふりそそぐ／冬はダイヤのように／きらめく雪になる／朝は鳥になって／あなたを目覚めさせる／夜は星になって／あなたを見守る／  
私のお墓の前で／泣かないでください／そこに私はいません／死んでなんかいません／千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています／  
千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています／  
あの大きな空を／吹きわたっています／

## ② 吉竹純の歌

されどゆつくりと墓の中に眠りたし千の風へと千切れるよりも

『過去未来』 河出書房新社刊

\* 「千の風」という認識・・・・・・・・儒教教理と魂・魄

仏教教理と四大（地・水・火・風）

\* 葬送事情（中国・朝鮮・日本）

- ① 「中国」 一九九〇年「土地を濫りに占有して喪葬および墳墓を建てることを制止することに関する通知」（民政部・国家土地官吏局）。当時「殯葬管理方式」およびその実施細則が出された。↓自殺者
- ② 「韓国」 二〇〇五年「火葬中心の葬墓文化時代の元年」
- ③ 「日本」 一九九一年「葬送の自由をすすめる会」の発足 ↓「遺灰を海や山に還す自然葬」（散骨）↓その秋・第一回自然葬の実施（相模灘）

二 亡骸への執着

- 1 目言も絶えぬ 柿本人麻呂歌（万葉2一九六・明日香皇女殯宮歌）―死別の悲しみ
- 2 肉体（亡骸）への執着

① 『源氏物語』夕顔

便なしと思ふべけれど、いま一度かの亡骸を見ざらむがいといふせかるべきを、馬にてもものせむ。

不都合だと思うだろうが、もう一度あの人の亡骸を見ないではなんとも気持がおさまらない。馬で行こう。なほ悲しさのやる方なく、ただ今の亡骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見む。

どうしても悲しみをはらすすべもなく、せめて今ある亡骸を見ないでは、ふたたびいつの世に、ありしなごらの姿に会うことができようか。

② 『古今集』

堀川の太政大臣、身まかりける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける

空蟬はからを見つともなくさめつ深草の山煙だに立て（16八三一）

③ 『日本書紀』（武烈紀）影媛物語（埋葬の後）

是に、影媛、埋むること既に畢りて、家に還らむとするに臨みて、悲鯁びて言はく、「苦しきかな。今日、我が

愛しき夫を失ひつること」といふ。

### 三 魂への執着（万葉歌）

#### ① 天智天皇挽歌

青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬかも（二一四八）

青々と樹木が茂り、旗が林立しているように見える木幡山のあたりを、魂が行き通うさまが目には見えるが直にお逢いできないことだ。

人はよし思ひやむとも玉かづら影に見えつつ忘らえぬかも（二四九）

他人はよしや思い慕うことをやめようと、私にはあの方が影として見えて見えて忘れられないことだ。

#### ② 天武天皇挽歌

やすみしし わご大君の 夕されば 見したまふらし 明けくれば 問ひたまふらし 神丘の 山の黄葉を 今

日もかも 問ひたまふらし 明日かも 見したまふらし その山を ふりさけ見つつ 夕されば あやに哀しみ

明けくれば うらさび暮らし あらたへの 衣の袖は 乾る時もなし（二一五五）

#### ③ 人麻呂の泣血哀慟歌

……わが恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありやと 吾妹子が やまず出で見し 軽の市に わが立ち聞け

ば 玉櫛 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉ぼこの 道行く人も 一人だに 似てし行かねば すべて

なみ 妹が名よびて 袖そ振りつる（二二〇七）

……大鳥の 羽易の山に あが恋ふる 妹はいますと 人の言へば 石根さくみて なづみ来し 良けくもそな

き うつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば（二二一〇）

\* 「良けくもそなき うつせみと 思ひし妹が 灰にていませば」 或本歌（二二二三）

#### 四 魂の遊離と借屍還魂

##### ① 『古今集』

空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき（10四四八）

恋しきにわびて魂まどひなばなし骸の名にや残らむ（12五七二）

かけりても何をか魂の来ても見む骸は炎となりにしものを（10一〇二・墨滅歌）

##### ② 『日本霊異記』

「閻羅王の使の鬼の、召さるる人の饗を受けて、恩を報いし縁」（中巻・第二十五）

\* 衣女の魂と亡骸

#### 五 儒教と仏教（土葬と火葬と散骨） 加地伸行『儒教とは何か』から

① 「儒教こそ実は死と深く結びついた宗教なのだ」「人間を精神と肉体とに分け、精神の主宰者（魂と言う）と、肉体の主宰者（魄と言う）とがあり、この魂・魄が一致しているときを生きている状態とする。逆に言えば、魂と魄とが分離しているときが死の状態であるということになる。すなわち、肉体の呼吸停止が始まると（脳死ではなく、心臓死を意味する）一致していた魂と魄とが分離し、魂は天上に、魄は地下へと行く。これが死である。逆に、分離していた魂と魄とを呼びもどし、一致させるとへ生の状態に成ることになる」

\* 「魂気は天に歸し、魄は地に歸す」（魂氣歸干天 形魄歸干地）『礼記』（郊特牲）

\* 「人有り下に在り、我之を輔けんと欲す。魂魄離散す」（有人在下 我欲輔之 魂魄離散）『楚辞』『招魂』（宋玉）

「魂よ歸り来たれ」（魂兮归来） 同

「儒教では、その肉体は、死とともに脱けてた靈魂が再びもどってきて、憑りつく可能性を持つものとされる。だから、死後、遺体をそのまま地中に葬り、墓を作る。それがお骨を重視する根本感覚となるのである」

② 「仏教では、死者の肉体は、もはや単なる物体にすぎない」「仏教は火葬にする。死者の肉体には仏教的意味が認められないからである。まして、焼いたあとの骨を拝むなどということは、仏教的にはおかしい」

\* 四大 「地」「水」「火」「風」↓虚仮の身

\* 「仏教は火葬を選びとる。肉体を焚焼することで、人間は虚仮なる『身』から解放される。四大はふたたび『空』に帰える。特に散骨は虚仮の状態にある人間をいちはやく、かつ、徹底して解放する葬法であった」「散骨の場合、火葬骨は粉碎され撒き散らされ、肉体の痕跡をとどめない」(拙論「火葬と散骨」)。

## 六 万葉歌の火葬・散骨

### ① 火葬

鏡なす我が見し君を阿婆の野の花橘の玉に拾ひつ (7-1404)

### ② 散骨

秋津野を人のかくれば朝撒きし君が思ほえて嘆きはやまず (7-1405)

玉梓の妹は玉かもあしひきの清き山辺に撒けば散りぬる (1415)

玉梓の妹は花かもあしひきのこの山陰に撒けば失せぬる (1416)

\* 火葬骨および骨灰を「君」「妹」ととらえる意識

朝鮮と日本

## 七 東日本大震災の歌など

### ① 佐藤通雅歌集『昔話』(むがすこ)より

昔(むがす) むがす、埒(らつ) もねえごどあつたづも 昔話(むがすこ) となるときよ早(はよ) 来よ  
腰折りてゆつくり移る老いのあり臨時遺体安置所の中

② 佐藤成晃震災歌集『地津震波』より

生き残りし者の務めの人探し瓦礫の下に今日は十七体  
家跡に流れつきたる遺体二つ三日晒され運ばれゆきぬ

浮かび来る遺体を捜す船いくつ鏡なす湾を左へ右へ

愛でなし義務ですらなし義姉の遺体探すと歩く二十日経てまた

「遺体などもう探すな」と言ふやうな夢を見せてよせめて妻には

③ 合同歌集『東日本大震災の歌』（宮城県歌人協会）より

ようやくに遺体に会いし嬉しさと悲しみに哭きき三月二十七日（菅野椋子）

安置所より息子に会えしと沈む夫受話器震うも僅かの安堵（佐佐木恵美）

安置所の柩に横たふ兄に会ふ探しさがして一月の後（鈴木 桂）

悪夢なら覚めよとめぐる安置所に姉の遺体の柩にまみえぬ（半沢里子）

津波から六月の後に骸もどる悔しかりしか苦しかりしか（宮城竹風）

遺体さえまだみつからぬ義妹よ代れるものなら代りたきものを（八島七重）

④ 「おかえり、小春 重機に乗り長女を捜し続けた母」毎日新聞二〇一一年九月二三日・東京朝刊」

八 おわりに（世の理・世間の道） 万葉歌より

男子の名を古日といふに恋ふる歌（山上憶良？）

世の人の 尊び願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我が中の 生まれ出でたる 白玉の 我が子古日は  
明星の 明くる朝は しきたへの 床の辺去らず 立てれども 居れども ともに戯れ 夕星の 夕になれば  
いざ寝よと 手を携はり 父母も うへはなさかり さきくさの 中にを寝むと うつくしく しが語らへば  
いつしかも 人となり出でて 悪しけくも 良けくも見むと 大舟の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の に



ふふかに 覆ひ来ぬれば

せむすべの たどきも知らに 白たへの たすきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ禱<sup>の</sup>み 国  
つ神 伏してぬかつき かからずも かかりも 神のまにまにと 我乞ひ禱<sup>の</sup>めど しましくも 良けくはなしに  
やくやくに かたちくづほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ  
立ち踊り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持たる 我が子飛ばしつ 世間の道（五九〇四）

稚ければ道行き知らじ賂はせむしたへの使ひ負ひて通らせ（九〇五）

布施置きて我は乞ひ禱<sup>の</sup>むあざむかず直に率行きて天路知らしめ（九〇六）